

# 博士論文概要

オタクの well-being を規定する心理社会的要因の検討

令和二年度

筑波大学大学院 人間総合科学研究科

ヒューマン・ケア科学専攻

山上尚彦

## 目的

現代日本において、オタク的な傾向性を有した人々が心理社会的な不適応の問題を抱えやすいという印象は多くの人々によって共有されており、マスメディアや評論でもそれが指摘される事は多い。しかしながら、厳密な手法によってそれを実証した例は少なく、それは誤った印象に基づいた認識である可能性も考えられる。仮に実際にオタクの心理社会的な不適応性が実証されるのであれば、その結果は臨床心理的な支援の枠組みを与えるという点で重要であり、不適応性が実証されなければオタクに対する客観的で正確な理解が得られ、偏見への反駁が可能となる。よって、オタクに関する実証的な研究は必要であると考えられる。そのため、本論文においてはオタクの **well-being** を規定する心理社会的要因を定量的に検討する事を目的とした。

研究 1 では、オタクの引きこもり親和性に着目し、引きこもりの心性がオタクに認められるか否かを検討する事を目的とした。

研究 1 の結果を参考に研究 2 においては、インターネットやオンラインゲームの使用が外向性や動機に応じて異なるという知見を参考に、オタク的な消費行動の影響も外向性や動機に応じて異なるか検討し、加えてオタクの消費行動類型に応じて心理的な傾向が異なるかを検討する事を目的とした。

研究 2 の結果を参考に、研究 3 においてはオタクのインターネット依存過程に特有なモデルがあるかを検討する事を目的とした。具体的にはオタクにおいて、不適応的認知がオタク的な消費行動に関係すると思われるインターネットの病的使用(オタク的 SPIU)・SNS(Social Networking Service)依存・全般的な病的インターネット使用(GPIU)の予測因子となりやすく、ソーシャルサポートの不足が GPIU と SNS 依存の予測因子となりやすいかを検討した。

## 対象と方法

研究 1 では、2015 年 7 月に 267 人(男性 116 人、女性 134 人、性別未回答者 17 人)の大学生に対して質問紙調査を実施した。2015 年における主流なオタク的な消費行動と考えられる項目に関して一定期間における消費行動量を自由記述によって数値で回答し、自己愛、精神的回復力、異性に対する態度、友人関係および両親との関係の満足感、インターネット

サービス使用頻度を尋ねた。

研究 2 では、2017 年 11 月から 2018 年 5 月にかけて、オタク的なコンテンツに関する教育と交流が豊富な通信制高等学校の 426 名(男性 180 名, 女性 246 名)に対して、オンライン上で質問紙調査を実施した。予備調査を実施した上でオタク的な消費行動の頻度の項目とオタク的消費行動の動機の項目を作成し、ポジティブ情動(PA)とネガティブ情動(NA), インターネット行動側面, 孤独感, 自尊感情, 絶望感, 首尾一貫感覚(SOC)に関する項目を尋ねた。

研究 3 では、2020 年 7 月にオンライン上にて質問紙調査を実施し、16 歳以上の 1115 名が回答した。回答者のうち、男性は 427 名, 女性は 630 名, 性別無回答者は 58 名であり、全回答者の年齢の平均は 37.5 歳(SD=0.81)であった。研究 2 の結果からオタクとオタクではない人々を判別する根拠となると考えられたオタク的消費行動項目それぞれの経験の有無を尋ね、不適応的認知, オタク的 SPIU, GPIU, SNS 依存, ソーシャルサポートの項目に関して尋ねた。

## 結果

研究 1 において、オタク的消費行動項目に基づいてクラスター分析を実施して回答者をオタク群と非オタク群に分類し、オタク群の方が「肯定的な未来志向」が低く、多様なインターネット上のコミュニケーションサービスを用いる傾向が示唆された。その他の項目では両群において有意な差は認められなかった。

研究 2 においては、外向性に応じてオタク的消費行動の影響が変化する傾向は認められなかったが、オタク的消費行動頻度が上昇するほど孤独感, 絶望感, PA が上昇した。また、オタク的消費行動頻度項目に基づいてクラスター分析を実施して回答者をオタク群とライトオタク群と非オタク群に分類し、全体的なオタク的消費行動頻度が高まるほどインターネットを自己表出・他者との関係・非日常性を志向して用いやすく、依存的な使用も増える事が示唆された。更に、オタク群は非オタク群と同等に外向的で、ソーシャルサポートはオタク群の方が多し事も示唆された。オタク消費行動の心理的な葛藤回避的動機は「NA」と正の相関, SOC の「把握可能感」および「処理可能感」と負の相関が認められ、話題共有の動機は「PA」と正の相関, 孤独感と負の相関が認められた。

研究 3 においては、オタク選定用の項目に基づいて回答者をオタク群と非オタク群に分

類し、オタク群が非オタク群に比べて GPIU・オタク的 SPIU・不適応的認知が高く、ソーシャルサポートが低い傾向が認められた。また、オタク群と非オタク群それぞれにおいて、不適応的認知尺度の下位尺度である「全般的な不適応的認知」および「インターネット不適応的認知」を説明変数とし、オタク的 SPIU を目的変数とする重回帰分析を実施した。その結果、予測力の差は大きくはないが、オタク群においては全体的に「全般的な不適応的認知」よりも「インターネット不適応的認知」の方がオタク的 SPIU を予測しやすいという特異性が示唆された。次に、オタク群と非オタク群それぞれにおいて、「全般的な不適応的認知」および「インターネット不適応的認知」と、ソーシャルサポートを説明変数とし、SNS 依存と GPIU を目的変数とする重回帰分析を実施した。その結果、オタク群においてはインターネット不適応的認知と面識の有る友人のサポートが高まるほど、また家族および面識の無い友人のサポートが減少するほど、SNS 依存が上昇した。非オタク群においては双方の不適応的認知と「大切な人」および面識の無い友人のサポートが上昇するほど SNS 依存が上昇した。GPIU の予測因子となったのは両群において 2 つの不適応的認知のみであった。SNS 依存および GPIU に関するインターネット不適応的認知の予測力はオタク群の方が高い事も示唆された。

## 考察

3つの研究から、オタクは悲観的な態度や社会不適応的な実感を抱きやすく、インターネットを多目的に依存的に用いる傾向が認められた。また、オタク特有のインターネット依存モデルがあることが認められ、特にインターネットに関係する不適応的認知がインターネット依存を予測しやすい事が示唆された。

研究 2 と研究 3 でオタクのソーシャルサポートの多寡は矛盾する結果であったが、これは普段から同好の者同士の交流機会を提供されていた研究 2 の高校生サンプルとインターネット上で無作為に得られた研究 3 の平均年齢 30 代後半のサンプルの性質の差異によって生じたものと考えられる。オタクは悲観的な態度を抱きやすく社会不適応的な実感を持ちやすい傾向があるが、同好の者同士の交流機会が用意されるか、そのような機会によって外向性が獲得されれば、その不適応的な実感やソーシャルサポートの実感は低減すると考えられる。

## 結論

オタクはインターネット依存と悲観的な態度の問題を抱えやすく、それらは互いに関連していると考えられる。しかし、オタクが旧来の一般的イメージのように社会不適応的であるという事は全面的に支持されず、環境や経験に応じてオタクの心理的な傾向も変化し、well-being も高まる傾向にあると考えられる。